

## 〈資料紹介〉和刻本『金鰲新話』の諸本

——江戸時代に出版された朝鮮時代の小説——

邊 恩 田

はじめに

近世前期一七世紀の日本において、朝鮮時代初期の伝記小説、梅月堂金時習の『金鰲新話』が開板され読まれていたことは、江戸時代の出版文化隆盛の実態とその国際性を明らかにする上でも、きわめて重要な事実といえよう。<sup>①</sup>

しかしながら和刻本『金鰲新話』の伝本については、内閣文庫に承応二年本があることは知られていて、<sup>②</sup>天理図書館の所蔵する一本（寛文刊記）の影印と紹介があったものの、<sup>③</sup>その後諸本についての報告はなく、その全貌はよくわからなかった。

筆者は、比較文学研究の立場から『金鰲新話』をとりあげたこともあって、本格的な伝本調査の必要性を感じ調べ始めていたところ、一九九九年九月に、朝鮮で板行された『金鰲新話』が中国の大連図

書館に蔵されることが報告され<sup>④</sup>、大いに注目を集めることがあった。そこで二〇〇一年に、和刻本『金鰲新話』にどのようなものがありどこに所蔵されるか各種蔵書目録類に調べていた内容を、「伝存本日録<sup>⑤</sup>」としてごく簡略に報告したことがあった。以後諸本の調査を続けてきたが、本稿はその報告である。

### 一 和刻本『金鰲新話』

『金鰲新話』の和刻本は、承応二年・万治三年・寛文十三年の、三種の刊記をもつものが確認できている。これら刊記を異にする伝本が、あわせて八本、伝存している。その種類と伝本数は、初回報告（注<sup>⑤</sup>）時から現在まで変わっていない。いまそれらを刊記に分け系統立てると次のようになる。外題を併記する。

1. 承応二年刊記本——一本あり

① 国立公文書館内閣文庫蔵本 「金鰲新話」

2. 万治三年刊記本—四本あり

① 京都大学文学研究科図書室蔵本 「道春 金鰲新話 全」

② 京都大学附属図書館蔵本 「梅月堂金鰲新話 全」

③ 早稲田大学図書館蔵本 「梅月堂金鰲新話」

④ 大連図書館蔵本 「梅月堂金鰲新話」

3. 寛文十三年刊記本—三本あり

① 京都大学文学研究科図書室蔵本 「金鰲新話全」

② 天理図書館蔵本 「道春 金鰲新話」

③ ハーバード大学燕京図書館蔵本 「道春 金鰲新話」

右に見るように、一六五三年刊記の国立公文書館内閣文庫蔵本が、現伝最古の伝本となる。日本国内だけでなく海外にも伝存している。

内題「梅月堂金鰲新話」は、諸本みな同じである。しかし外題はさまざまで、「金鰲新話」とするもの二本、「梅月堂金鰲新話」とするもの三本、「<sup>道春</sup>調點金鰲新話」とするもの三本の、三種の書名をもっていることがわかった。以下、それぞれの伝本についてこれまでの調査で知り得たところを述べていきたい。

## 一 諸本の紹介

1. 承応二年刊記本

① 国立公文書館内閣文庫蔵本

整版（木版） 大本 一冊

外題 「金鰲新話」

内題 「梅月堂金鰲新話」

表紙 薄茶色 五つ目綴じ 縦二七・八×横一八・二cm

版式 四周单边有界 十行×二十字 丁数・四十五 匡郭二

〇・四×一五・二cm

版心 上下白口白魚尾（一、八、十三、二十、二十九、四十五

丁）、黒魚尾（九、十二、二十一、二十八丁）

柱刻 「梅金鰲（丁数）」

刊記 「承應二年仲春／崑山館道可處士刊行」（／は行替り）

(1) 『改訂内閣文庫漢籍分類目録』（内閣文庫、昭四六）の「子 一

一 小説家類（四）傳奇小説」項に「<sup>梅月堂</sup>金鰲新話 朝鮮金時習

撰 承應二刊（野間三竹舊蔵） 昌 一冊 三〇九函 一九二

号」（二九〇頁）と録される。表紙に貼られた図書分類表に見る

ように、「漢書」門に分類配架されていたことがわかる。「小説」

の朱書票も貼られている。

- (2) 題簽はなく、表紙左上に墨筆で小さく「金鰲新話」と直書きしている（図1）。表紙中央部に長方形に薄茶色が残り、それ以外は汚れか焼け焦げで黒く変色している。薄茶色が本来の色である。変色時期は、表紙右上の「昌平坂學問所」印影の半分残っていることから、昌平坂學問所收藏以後であることは確かであろう。五つ目綴じは、とじ穴五つでとじる線装本の装訂法で、唐書の用語では五針眼釘法。大型本の多い朝鮮本に典型的な装訂法で、近世初期の和本に多く見られ、日本では「朝鮮綴じ」と通称している。
- (3) 崑山館道可処士について

刊記は末丁の四十五丁裏左下に、枠で囲んで刻されている（図3）。刊行者を「崑山館道可處士」とする。その詳細はあまりわからないように、矢島玄亮氏の『徳川時代出版者集覧』は、崑山館道可の出版物として「聚分韻略」（慶安五）と「群書拾唾 一二卷」（承応一）を挙げ、井上隆明氏の『増訂近世書林板元総覧』にも同記載がなされていた。これに加えると、『包丁書録』承応元年正月中旬刊（内閣文庫蔵）、『老子庸齋口義』承応元年十一月再刊（東京大学総合図書館蔵）の二点がある。特に後者は「羅山点」と録されるが、近年該書（明暦三年刊本）について、「道春調点」は徳倉昌堅によるものだという報告があり、注目される。後掲『金鰲新話』にも道春調点とするものがあり、慎重に考究さ

れるべきことであろう。さらにもう一点、俳諧書『崑山集』も開板している<sup>⑦</sup>。早稲田大学図書館蔵本には「慶安四曆仲秋吉辰日／崑山館道可處士鈔板」とその刊記に見えている。慶安五年に開板が出来上がり三条の本屋（秋田屋平左衛門と推定される）にすり置いていたとよむ一句があるという。以上のことから、崑山館道可は慶安から承応頃にかけて京都で活動した板元であったと知られる。

(4) 蔵書印記「白雲書庫」「昌平坂學問所」「淺草文庫」と所蔵経緯

四十五丁裏刊記の上に「白雲書庫」朱印が捺されている。これは野間三竹<sup>⑧</sup>（一六〇八—一六七六）の蔵書印であり、内閣文庫収蔵以前に彼が所蔵していたことになる。「白雲書庫」は、「常に毎冊尾左下隅に押し込めるのが特徴である」とされ、本伝本においても同位置に確認できた。承応本の刊年一六五三年は父野間玄琢卒後のこととなるので、三竹が捺したものと判断できる。

また前表紙右上と四十五丁裏欄上部の二カ所に「昌平坂學問所」<sup>⑨</sup>印記がある。これは寛政九（一七九七）年からの呼称であり、四十五丁裏欄上に「文化戊辰」の年号印もあって、学問所への収蔵が一八〇八年とわかる。その蔵書は明治一七（一八八四）年創設の内閣文庫に移管され、今日に至っているという。しかし巻頭の二丁匣郭内右下に「淺草文庫」<sup>⑩</sup>の双辺長方朱印記があることか

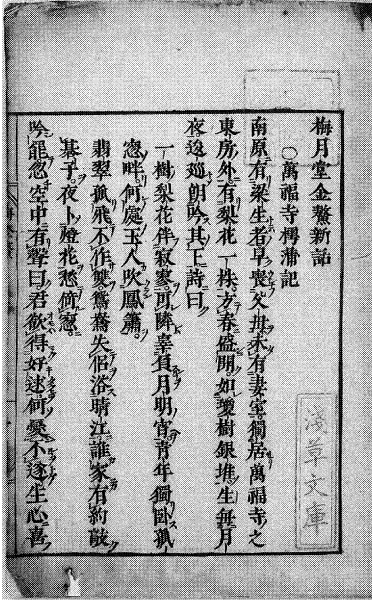


図2 一丁表

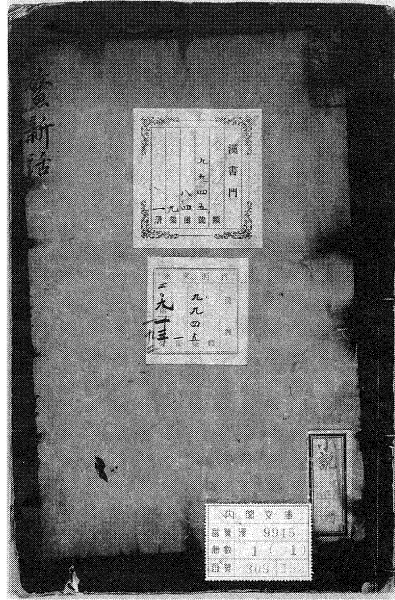


図1 表紙 国立公文書館蔵

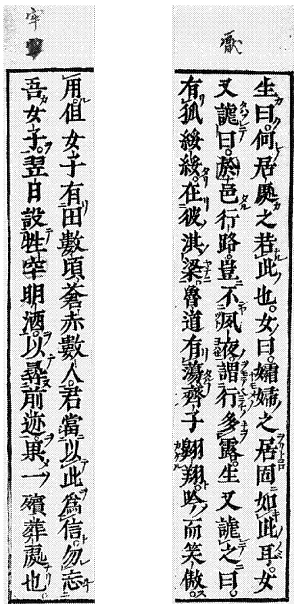


図4 八丁裏10行・四丁表2行

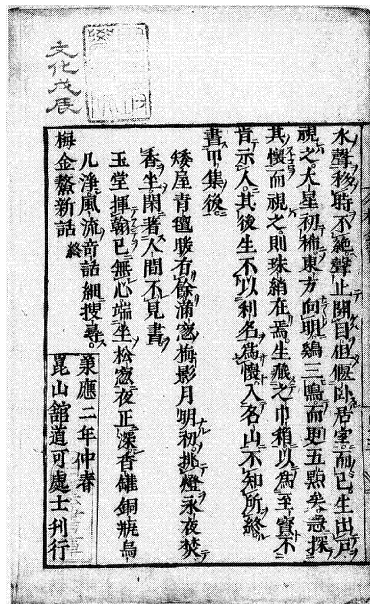


図3 四十五丁裏

ら（図2）、明治八（一八七五）年から七年間は官立図書館浅草文庫としてあったことも知られる。

以上三種の印記から、承応本が経てきた所蔵場所は、野間三竹から昌平坂学問所へ、昌平坂学問所から浅草文庫へ、そして浅草文庫から最終的に現在の国立公文書館（印記「日本政府圖書」が一丁表欄上に有る）へ、という変遷ルートであることが判明した。

(5) 本伝本の注目すべき特徴に書き入れがある（図4）。一つは、四丁表2行目の「於」字を朱筆で□に囲み、その欄上に「厭」の字を書き入れている。その二は、八丁裏の10行「牢」の字を囲みやはり欄上に朱筆で「牢」字を注記している。

この注記は非常に重要な情報を提供する。すなわち書き込みをした人物が、何かを見て字の誤りに気付いたがゆえに正しい字「牢」「厭」を書き入れたということ、つまり校合を行ったことを意味するからである。一体何を見ての訂正かという疑問は、一九九九年発見の朝鮮刊本に「牢」「厭」の字が確認できたことをもって、朝鮮本を見て誤刻に注記を施した、ということが明白となったのである。

しかも、その朝鮮刊本が、室町末から近世初めに京都居住の著名な医師曲直瀬正淋（養安院）の手元にあったことが彼の蔵書印記から確認できているのであるから、たとえ現在は大連図書館所

蔵にかかるものの、一七世紀初め京都にあった朝鮮刊本（養安院所蔵）をもとにして、日本で板刻印行したのが和刻本『金鰲新話』だという結論になり、これまで不詳であったことが判明するに至った。

では、書き入れは誰によるものであろうか。所蔵者である野間三竹自身の可能性が最も高いと言えよう<sup>①</sup>。当時書籍が貴重であったことを鑑みれば、他人の本にたやすく書き入れができるとは考えにくいからである。

## 2. 万治三年刊記本

①京都大学文学研究科図書室蔵本

整版（木版） 大本 一冊

外題 題簽「道春金鰲新話 全」

内題 「梅月堂金鰲新話」

表紙 栗皮色（赤茶褐色） 五つ目綴じ 縦二七・二×横一

七・五cm

版式 四周单边有界 十行×二十字 丁数・四十五 匡郭二

〇・三×一五・一cm

版心 承応二年刊記本と同じ

柱刻 「梅金鰲 （丁数）」

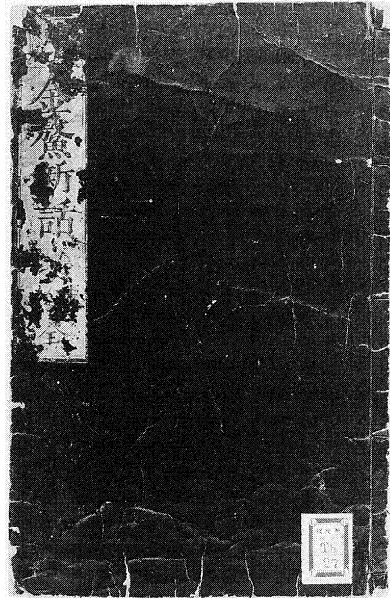


図5 表紙 京都大学文学研究科図書室蔵

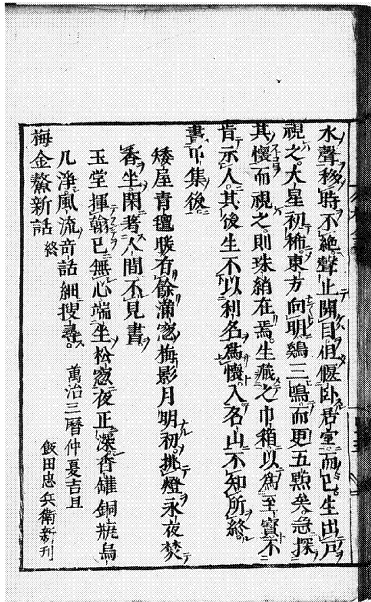


図6 四十五丁裏

〈資料紹介〉和刻本『金鰲新話』の諸本

刊記 「萬治三曆仲夏吉且／飯田忠兵衛新刊」

- (1) 図書カードに「梅月堂」金鰲新話／金時習（梅月堂）著／飯田忠兵衛 万治3／45丁 27・5 cm 和／（寄贈 昭31・10・3）と記す。京都大学文学部図書室発行『頼原文庫目録』（昭34年5月）によれば頼原退蔵氏寄贈本と知られ、「梅月堂金鰲新話／飯田忠兵衛板 萬治3年刊／和美濃判」と録している。

- (2) 前表紙左上に双辺の刷り題簽を貼るが、書名「金鰲新話」に「道春訓點」の角書を付けている（図5）。この角書をもつ寛文十三年刊記本（天理図書館蔵）の紹介がこれまでにあったため、寛文本イコール「道春訓點」本という理解がされているようだが、万治三年刊記本にも「道春訓點」とする伝本があることが確認できた。注目すべきことである。また「全」の字があることにも留意したい。

- (3) 飯田忠兵衛について

刊記には「萬治三曆仲夏吉且」の刊年に続き、「飯田忠兵衛新刊」を刻している（図6）。すなわち承応二年刊記本の木記を削去し、新刊する板元の名を入木している。飯田忠兵衛は、井上和雄氏編『慶長以来書賈集覧』に見れば、京都にあった板元で「風俗通」（萬治三）、「白虎通」（寛文二）、「和句解」（寛文二）、「釋氏六帖」（寛文九）の出版物が紹介される。また前掲『徳川時代出版者集』

「梅月堂金鰲新話 万治3」の書目が挙がるが、これは頼原文庫本をさすもので、その他「徒然草抄」三卷（寛文一）、「孝経大義」（寛文五）、「徒然草文段抄」七卷（寛文七）、「義楚六帖」二四卷（寛文九）の出版物もあり、万治から寛文頃に活動した板元であることが知られる。なお前掲『改訂近世書林板元総覧』に飯田忠兵衛は録されていない。

② 京都大学附属図書館蔵本

整版（木版） 大本 一冊

外題 題簽「梅月堂金鰲新話 全」

内題 「梅月堂金鰲新話」

表紙 縹色 五つ目綴じ 縦二七・三×横一七・五 cm

版式 四周单边有界 十行×二十字 丁数・四十五 匡郭二

〇・三×一五・一 cm

版心 承応二年刊記本に同じ

柱刻 「梅金鰲 （丁数）」

刊記 「萬治三曆仲夏吉且／飯田忠兵衛新刊」

- (1) 図書カードには「梅月堂 金鰲新話／万治三年刊 大／函4ー47 架ハ 4」とあり板元に関する記載はなかったが、実見したところ、四十五丁末尾に「飯田忠兵衛新刊」が刻されていた。

前掲①本同様板元をあらわす刊記を有し、大いに注目される。

- (2) 題簽は表紙左上に貼る。「全」の字も付している。また書名以外にも、分類上必要な書票や「小説」など部門を記した小紙も貼り付けてある（図版は拙著（注④）二二〇頁を参照されたい）。

- (3) 一丁表欄右に「京都帝國大學圖書之印」朱印記があり、丸小印に収蔵日を「明治・三三・四・一七購求」（一八九九年）とする。また匡郭内右下に「□□（阿部カ）家蔵」の朱印記があり旧蔵者とおぼしい。

- (4) この本の特徴として、前表紙見返しに五つの作品題を墨筆で書き入れていることがある。

萬福寺楞蒲記 一丁

李生窺墻傳 九丁

醉遊浮碧亭記 十九丁

南炎浮州志 廿七丁

龍宮赴宴錄 卅五丁

このような作品題の書き入れは、後出の寛文本①と本依本にのみ認められ、本依本は作品が始まる丁数も記している。ところで朝鮮刊本では、このような作品題を目次のように刻している（但し丁数はなし）、和刻本には見られないことといわれていたが、和刻本の二本にそれが有ることがわかった。ただ漢字を見るに、朝鮮刊本に

は「萬福寺擣、蒲記」とあるので、それを見ての書き入れではない。和刻本はすべて「萬福寺擣、蒲記」とする。

③早稲田大学図書館蔵本

整版（木版） 大本 一冊

外題 題簽「梅月堂金鰲新話」

内題 「梅月堂金鰲新話」

表紙 茶色 四つ目綴じ 縦二六×横一八・一cm

版式 四周单边有界 十行×二十字 丁数・四十五 匡郭二

〇・二×二五・一cm

版心 承応二年刊記本と同じ

柱刻 「梅金鰲 （丁数）」

刊記 「萬治三曆仲夏吉旦」

(1) 『早稲田大學圖書館所蔵漢籍分類目録』（平成三年十二月）には、

「梅月堂金鰲新話 李朝・金時習撰 萬治三年五月 和大 文庫五一九七〇」と記す。当図書館によれば「鰲」字は「鰲」字であるとされた。

(2) 題簽は刷り題簽で、前表紙左上に貼る。ただし「梅月堂」は小文字の横書きである。下半分ほどが剝がれ落ちたため、「新」の字は墨筆で書き、「話」字は別の白小紙片に墨書したものを貼つ

〈資料紹介〉和刻本「金鰲新話」の諸本

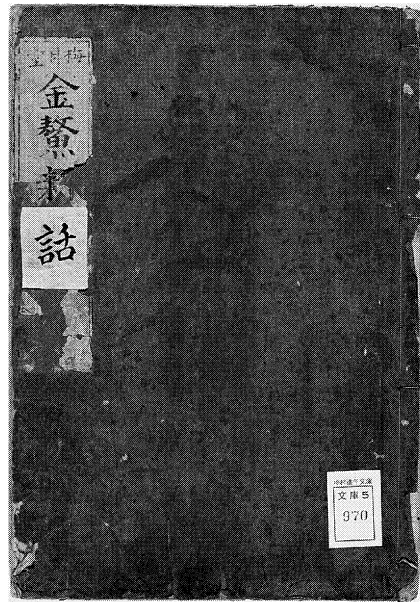


図7 表紙 早稲田大学附属図書館蔵

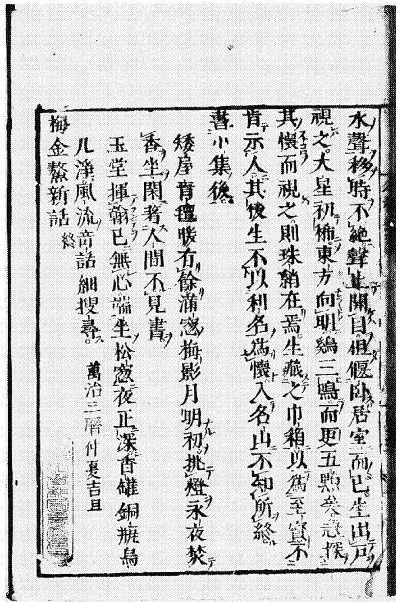


図8 四十五丁裏



ている（図7）。

(3) この伝本のみ「四つ目綴じ」の装訂である。四つ目綴じは和本の代表的な綴じ方であり、他伝本すべてが五つ目綴じであるのにくらべ特異といえ注意をひく。あるいはかなり後の印行や装訂によつたものかとも思われる。

(4) 一丁表の右匡郭上に、長形の「故中村進午博士記念図書」朱印記があり、昭和十五年一月十六日の寄贈本と記す。同匡郭外の右下と四十五丁裏左下匡郭内に「早稲田大学法学部図書室蔵書」の朱印記がある。

(5) 本伝本の刊記において、特に注目すべきことは、すでに取りあげた万治三年刊記本の①と②の本に有つた、板元をいう「飯田忠兵衛新刊」の刻が無いことである（図8）。この点については次の④であわせて詳述する。

#### ④大連図書館蔵本

この伝本は筆者未見である。『南満州鉄道株式会社大連図書館和漢図書分類目録 第3編 文学語学』（南満州鉄道株式会社大連図書館、昭和六年十一月発行（但し書きに「昭和二年三月末日現在」とある））によれば、万治三年刊記本が蔵されている。目録に「梅月堂金鰲新話 1 大谷／萬治3 和大」と録されている。

次に記す書誌事項は、崔溶澈氏より提供を受けた写真資料<sup>⑮</sup>（表紙と四十五丁裏）によるものであり、不分明な点がある。今後調査の機会が与えられれば補いたい。

整版（木版） 大本 一冊

外題 「梅月堂金鰲新話」\*後の手書という。原題は不明

内題 「梅月堂金鰲新話」

表紙 （色、大きさ、綴じ方など未見のため不詳）

版式 四周单边有界 十行×二十字 丁数・四十五 匡郭未詳

柱刻 「梅金鰲（丁数）」

刊記 「萬治三曆仲夏吉且」

#### (1) 「大谷文庫」について

右掲目録に「大谷」の字だけを特にゴシックで記してあることから確認できるように、本伝本は現在大連図書館に「大谷文庫」として所蔵されている。崔溶澈氏によれば、伝本一枚目に蔵書印「寫字臺之藏書」<sup>⑯</sup>が捺してあるという。しかしこの蔵書印は、大谷光瑞師個人のものではないことに注意したい。

西本願寺派第二十二世門主（法名鏡如）大谷光瑞師（一八七六一九四七）<sup>⑰</sup>がその蔵書量を誇り、漢籍類の貴重書、明清時代小説類が豊富であることはよく知られる。その蔵書の現在中国の地にある歴史的経緯と特質については、伊藤漱平氏が夙に詳しく考

究されているが、それによれば、かつて日本の神戸から運ばれた書籍の中に、この万治三年刊記本『金鰲新話』があったと考えてよさそうである。

ところで、門主大谷家の文庫は「写字台文庫」と称され、膨大な典籍を所蔵していたとされるが、その目録『写字台文庫外典目録』を調べたところ、「小説家附録碑官野史 第廿九函」項に、

金鰲新話 一卷

の書名が認められた。翻刻された宗政五十緒氏は、この目録収載のほとんどは第十八世文如上人の所蔵書であり蒐書もされたものと推測できるとされ、そのほとんどは龍谷大学の所蔵となったとされている。ところが現在龍谷大学に『金鰲新話』の所蔵は確認できないようで、となるとおそらくこの本がかつて中国へ送られ、現大連図書館蔵となった本であろうと、推断されるのである。したがって大連図書館蔵『金鰲新話』にある「寫字臺之藏書」印記は、二十二世（大谷光瑞）ではなく、文如上人の代に捺されたものとすべきであろう。

(2) 刊記で注目すべきことは、板元をいう「飯田忠兵衛新刊」がないことである。結局、万治三年刊記本四本のうち、③早稲田大学図書館蔵本と④大連図書館蔵本に、板元の刊記が無いということになった。ここで確認しておくべきは、万治三年刊記本のうち、

〈資料紹介〉和刻本『金鰲新話』の諸本

①と②には「飯田忠兵衛新刊」が有ったことである。つまり同じ万治三年刊記本であっても、板元名を有するものと有しないものの、二種あるということが判明したわけである。

この有無が意味するところはきわめて重大だと思われる。すなわち、印行の時期、伝本の先後、あるいは板木の移動といった事項がそこから読みとれるのではないかと思われる。筆者は、板元を有しない方が後印本と考えている。しかしこれを明らかにするには、次の寛文十三年刊記本も含め諸本間のさまざまな事項を詳細に調べる必要がある。

3. 寛文十三年刊記本

①京都大学文学研究科図書室蔵本

整版（木版） 大本 一冊

外題 「金鰲新話 全」

内題 「梅月堂金鰲新話」

表紙 薄茶色 五つ目綴じ 縦二六×横一七・五 cm

版式 四周単辺有界 十行×二十字 丁数・四十五 匡郭二

〇・二×一五 cm

版心 承応二年刊記本と同じ

柱刻 「梅金鰲 (丁数)」

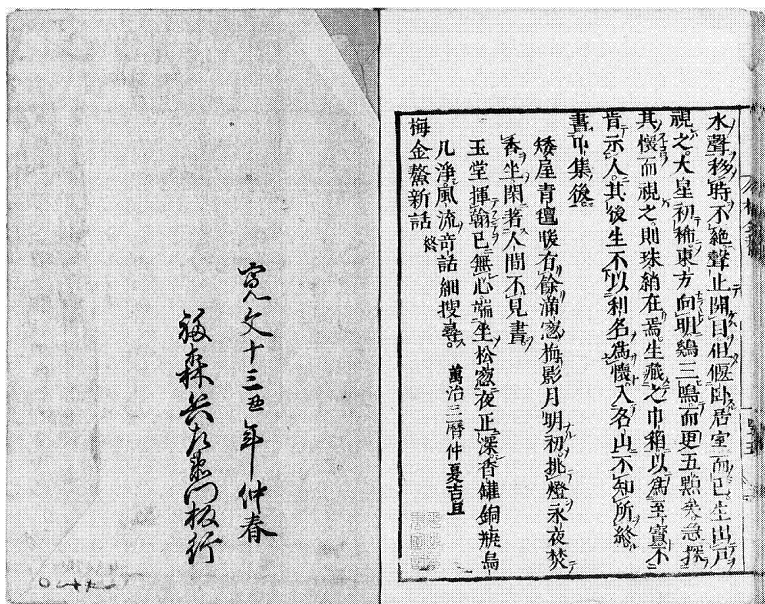


図9 四十五丁裏・裏表紙見返し 京都大学文学研究科図書室蔵

刊記 「萬治三曆仲夏吉且」

奥付 「寛文十三丑年仲春／福森兵左衛門板行」

(1) 図書カードには「梅月堂 金鰲新話／福森兵左衛門 寛文十三  
／45丁 26・5 cm 和 映入」とある。

(2) 題簽はなく、前表紙左上に墨筆の直書きである。同位置にあつた墨字が消えた（消した？）痕跡が残っており、その上にあらたに墨書きしたもの。ただ、「全」とことさらに記している点に留意したい。というのは次の同じ寛文本②③には「全」の字が題簽に見えないからである。

(3) 一丁表右匡郭内下に印記「今西春秋」、同中央部に小円形「今西龍」がある。京都大学文学部図書室発行『今西文庫目録』（昭和34年6月）には今西龍氏の寄贈書とし「梅月堂金鰲新話／（朝鮮）金時習撰／寛文十三年日本福森兵左衛門刊本」と録している。

(4) 前表紙見返しに、五つの作品題が墨記されている。ただし前掲2—②本のような丁数の記入はない。

(5) 刊記「萬治三曆仲夏吉且」は四十五丁裏本文末にあるが、「飯田忠兵衛新刊」の板元名の方だけ削去されて、無い。その上で、裏表紙見返し中央部分に「寛文十三丑年仲春／福森兵左衛門板行」の奥付がある（図9）。福森兵左衛門は、『慶長書買集覽』によれば京都五条通の板元で、『下學集』『日用寶鑑』（貞享二）、

『浄土見聞集』（貞享四）、そして元禄十一年八月に羅山の『怪談全書』を刊行しているのは留意されよう。刊記と奥付の内容・位置は、次の②③とも共通する。

②天理図書館蔵本

整版（木版） 大本 一冊

外題 題簽「道春金鰲新話」

内題 「梅月堂金鰲新話」

表紙 藍色 五つ目綴じ 縦二六・七×横一七・七 cm

版式 四周单边有界 十行×二十字 丁数・四十五 匡郭二〇・二×一五・一 cm

版心 承応二年刊記本に同じ

柱刻 「梅金鰲（丁数）」

刊記 「萬治三曆仲夏吉且」

奥付 「寛文十三丑年仲春／福森兵左衛門板行」

- (1) 題簽「道春金鰲新話」が表紙左上に貼られている。双边の刷り題簽。題字の下に「全」の字は見えないものの、題簽全長の三分の一以上が不自然に空いている。

- (2) 一丁欄上に印記「紫景文庫」があり、裏表紙見返し左上端にも横書き小文字「紫影文庫」も見える。藤井乙男氏（一八六八—

〈資料紹介〉和刻本『金鰲新話』の諸本

九四五）が旧蔵者であり、昭和三十年五月教会本部より寄贈収蔵された。

- (3) 刊記の「萬治三曆仲夏吉且」は、末丁の四十五丁裏に、奥付「寛文十三丑年仲春／福森兵左衛門板行」は、右①本同様、後表紙見返し中央にある。

- (4) 本伝本には、数カ所に書き入れがある。一二裏6行目「磬」字に「キヤウ」の振りカナを書き入れ、欄上に「足音」とその意味を注記。また三丁表8行「繳」字、五丁裏8行日「烏程」字についても欄上に書き入れがある。他に振り仮名等もあるが今略す。

③ハーバード燕京図書館 (Harvard-Yenching Library) 蔵本

整版（木版） 大本 一冊

外題 題簽「道春金鰲新話」

内題 「梅月堂金鰲新話」

表紙 濃藍色 五つ目綴じ 縦二六・五×横一七・八 cm

版式 四周单边有界 十行×二十字 丁数・四十五（匡郭は未見につき未詳）

版心 承応二年刊記本に同じ

柱刻 「梅金鰲（丁数）」

刊記 「萬治三曆仲夏吉且」

奥付 「寛文十三丑年仲春／福森兵左衛門板行」

おわりに

- (1) 原本は未見であり、同館より入手した複製資料によって以下記す。「表紙色」と「本の大きさ」は徐斗鉢氏「金鰲新話について」〔『金鰲新話』保景文化社、一九八六〕によった。

- (2) 前表紙見返し右上に分類記号と思われる「J/35685/8161」の記入があり、左横に、別紙に作者・作品等に関して手記したものを添付。JがJAPANのJなら和書分類に収まるかと思われたが、すでに岡雅彦・青木利幸両氏編の『ハーバード燕京図書館和書目録』<sup>22)</sup>が備わっていた。同館所蔵本について、

梅月堂金鰲新話 1巻／朝鮮金時習撰／林羅山点／福森兵左衛門 寛文13(1673)／1冊 大／題簽：道春訓点金鰲新話/J35685-8161

- (3) 題簽「道春訓点 金鰲新話」を表紙左上に貼る。右掲②本同様題字下に空白があるが、写真判読が難しく「全」字は無いとしておく。

- (4) 一丁表右匡郭内の下方に「哈佛大學漢和圖書館珍藏印」の印記がある。その下に「松□藏書」印記もあるが不詳。同館収蔵は一九六〇年十月六日。

- (5) 刊記「萬治三曆仲夏吉且」は四十五丁裏に、奥付「寛文十三丑年仲春／福森兵左衛門板行」は、裏表紙見返し中央にある。

これまで和刻本『金鰲新話』諸本について報告してきた。外題に相違がある点、「道春訓点」角書の有無は、見過ごせない重要事項であろう。これまで「道春訓点」は寛文本のみという理解に留まっていたが、そうは言えない。万治三年刊記本にも「道春訓点」と角書した伝本があるからである。

また、二十二丁裏9行「風」の字は、朝鮮刊本と承応本に「嵐」とあり、万治本と寛文本はすべて「風」とされてきたものの、調査結果、万治三年刊記本のうち①京都大学附属図書館蔵本および②京都大学文学研究科図書室蔵本にも「嵐」とあることが判明した。万治本と寛文本をひっくり返して扱うことはできないのである。そして①②はいずれも「飯田忠兵衛」の板元刊記を有する伝本である点、きわめて興味深く重要な事実といえよう。さらにこのことは、「風」とする伝本では、二十一から二十四丁の板木が異板であることも符合するのである。これも含めさらに版本の調査を詳細に進める必要がある。刊記や奥付も重要な情報を伝えるものとして、本文・板面の異同等の考察が今後の課題となろう。

注

- ① 特に近年江戸期の出版文化に関する多くの研究成果が挙げられている。
- ② 崔南善『金鰲新話解題』『啓明』第十九号、一九二七、五、四頁。
- ③ 『景印』『道春訓点金鰲新話』、大谷森繁「天理図書館本『金鰲新話』解題』『朝鮮学報』第一二二輯、一九八四、七。
- ④ 崔溶澈『金鰲新話』朝鮮刊本の発掘とその意義、『中国小説研究會報』第三九号、一九九・九。邊恩田『朝鮮刊本『金鰲新話』発掘報告の紹介と成立年代』『朝鮮学報』第一七四輯、二〇〇〇、一（拙著『語り物の比較研究』翰林書房、二〇〇二、二）に収載。なお崔氏の日本語文『金鰲新話』朝鮮刊本の発掘と版本に対する考察（『大妻比較文化』3、二〇〇二、三）がある。
- ⑤ 邊恩田『日本江戸時代における『剪燈新話句解』と『金鰲新話』の受容（韓国語文）』（高麗大学校民族文化研究所主催国際学術会議、二〇〇一・一〇。『民族文化研究』第35号二〇〇一・一二）に収載。なお収載時校正の機会が与えられず図版のAとBが入替わっている。及び、『朝鮮刊本『金鰲新話』と林羅山』（『朝鮮文学論叢大谷森繁博士古稀記念』白帝社、二〇〇二、三）の中で、『金鰲新話』伝存本目録」とし承応本・万治本・寛文本計八本を簡略報告した。
- ⑥ 大野出『道春点『老子口義』と徳倉倉堅』『近世文藝』69号、一九九〇、一。
- ⑦ 長友千代治『江戸時代の書物と読書』東京堂出版、二〇〇二、二七―二八頁参照。『崑山集』については中村俊定・森川昭校注『古典俳文学大系1 貞門俳諧集1』（集英社、昭和四五）の二八三―五頁と四五九頁参照。慶安五年に三条の本屋で開板ができ売りに出たことをいう句があることを紹介される。
- ⑧ 三竹は通称、名は成大。江戸前期の著名な医師で幕府医官を勤めた。

〈資料紹介〉和刻本『金鰲新話』の諸本

- ⑨ 儒学者であり蔵書家として知られた。号を静軒または白雲洞という。三竹は、野間玄塚（一五九〇―一六四五）の長男であり、玄塚は「白雲老人」と号し、「白雲書庫」が蔵書印である。父子二代にわたる用いたものとされる。
- ⑩ 『内閣文庫蔵書印譜』昭四四、七九頁。
- ⑪ 昌平坂学問所は、林羅山が寛永七年上野忍ヶ岡に開いた私塾や孔子廟に始まり、元禄三年徳川綱吉が湯島に移築し聖堂・大成殿と称した。寛政九年から幕府はこれを官学に改組し昌平坂学問所と改め、幕臣の子弟を教育する教学機関とした。同時に林家の蔵書二万四千余冊を全部ここに移管し、幕末に九万五千冊に及んだ蔵書のうち八万八千余冊が明治七年創設された内閣文庫に移管され、今日に至る。
- ⑫ 浅草文庫は、昌平坂学問所や和学講談所・書籍館等の蔵書を継承して明治八（一八七五）年から一四年までの七年間、東京浅草蔵前に設けられた官立図書館。楷書の双辺長方朱印「浅草文庫」が蔵書各冊の巻頭に捺されるのが特徴とされ、はたして本伝本でも当該場所に認められた。蔵書の大部分が現在国立公文書館内閣文庫に継承されている。
- ⑬ 大谷森繁氏より承応本の複写資料を提供頂いた。深謝申し上げます。不鮮明であった朱筆の書き入れは原本調査時に確認できた。また朝鮮刊本の資料を頂いた崔溶澈氏に深謝申し上げます。
- ⑭ 邊恩田『朝鮮刊本『金鰲新話』の旧所蔵者養安院と蔵書印―道春訓点和刻本に先行する新出本―』『同志社国文学』第五五号、二〇〇一、二。
- ⑮ 時期が承応本の刊行一六五三年以降であることは動かないが、人物については後の昌平坂学問所や浅草文庫所蔵時期も想定はできよう。
- ⑯ 『最新発掘朝鮮刊本『金鰲新話』』高麗大学校中語中文学科・崔溶澈、一九九・二一。

- ⑮ 注④崔溶澈前掲書、四五頁。
- ⑯ 朝倉治彦編『藏書名印譜』（臨川書店、昭五〇）の「僧侶附寺院」部に「西本願寺」として印影が載る。
- ⑰ 伊藤漱平「大連図書館蔵「大谷本」の来歴およびその現状（上）」、「同（中）」、古典研究会編『汲古』九、十号、汲古書院、昭六一、六、一二月。筆者は二〇〇一年四月に伊藤漱平氏より大連図書館と大谷文庫に関する多くの資料と懇切なる書信を汲古書院の坂本健彦社長を通していただいた。ここに記して両氏に深謝申し上げたい。
- ⑱ 宗政五十緒『近世京都出版文化の研究』同朋舎出版、一九八二、四一五頁。
- ⑲ 注⑯の三九九、四〇四頁。なお中田篤郎「南満州鉄道株式会社大連図書館旧蔵「大谷本」淵源（上）（下）」、『龍谷史壇』九八、一〇一・一〇二号、芝田幹夫氏訳の張本義・王若「大連図書館「大谷文庫」蔵書について」、『龍谷史壇』第一二三号、一九九九・一〇）があり参照されたい。
- ⑳ 本稿執筆中に知った「金鰲新話版本考」（早川智美『大谷學報』二〇〇六・一）では、版本に影印本を含め、ハーバード燕京図書館蔵本影印と天理図書館蔵本影印が同一のものだと指摘する。しかし氏があるという（一七頁）。「天理図書館の隠し印」は私の手元の影印本（保景文化社、48頁）には見あたらせず不可解である。また二種影印間の「一致しない点」を④⑤⑥あげる（一五頁）が④は誤であり、筆者の知る「一致しない点」は多い。たとえば天理本影印にのみ有る虫損又は和紙の跡は11丁オ3行「會月上」、11丁ウ6行「待兒」、同8行「勸生口」、12丁オ3行「和之」、12丁ウ6行「江風」、8行「肅颯」、19丁ウ8行「鮮」字右横、20丁オ7行「望」、同「布貿」、20丁ウ2行「吟」にあり、ハーバード本影印にのみ有る虫損又は和紙の跡は、11丁オ10行「欲」、同「興」字左横、11丁ウ5行「万」、12丁オ6行「勝」、10行「几案」、同「展」字右

横、19丁ウ3行「某」、同7行「醉」字左横、20丁オ2行「里」、6行「玩天」、20丁ウ5行「不」字にある。

㉑ 『ハーバード燕京図書館 和本目録』書誌学書目シリーズ36・ゆまに書房、一九九四。

〔参考文献〕

- 井上和雄編『慶長書買集覧』彙文堂書店、大正五
- 矢島玄亮『徳川時代出版物集覧』萬葉堂書店、昭五一
- 奥野彦六『改訂増補江戸時代の古版本』臨川書店、昭和五七
- 長友千代治『近世の読書』青裳堂書店、一九八七
- 渡辺守邦『古活字版伝説—近世初頭の印刷と出版』青裳堂書店、一九八七
- 長澤規矩也『長澤規矩也著作集 第七卷』汲古書院、昭和六二
- 岡雅彦・青木利幸編集『ハーバード燕京図書館和書目録』一九九四
- 中野三敏『書誌学談義 江戸の板本』岩波書店、平成七
- 井上隆明『増補近世書林板元総覧』青裳堂書店、平成一〇
- 井上宗雄・岡雅彦・尾崎宗・片桐洋一・鈴木淳・中野三敏・長谷川強・松野陽一編著『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店、一九九九
- 鈴木健一『林羅山年譜稿』ベリかん社、一九九九
- 渡辺守邦・後藤憲二『新編蔵書印譜』青裳堂書店、平成二三
- 長友千代治『江戸時代の書物と読書』東京堂出版、二〇〇一
- 橋本侯之介『和本入門』平凡社、二〇〇五

附記 資料掲載を御許可いただいた国立公文書館・早稲田大学附属図書館・京都大学文学研究科図書館に深謝申し上げます。

追記 初校後、寛文十三年刊記本①の末丁左下にある印影は「平出氏書室記」であることがわかった。